

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版 B6判
三五二頁
三五〇〇円
連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使える
本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

連句 第42号 季刊



水原秋桜子編 二三〇〇円
俳句鑑賞辞典
貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かした句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典
結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円
季語辞典
日本の季節にまつわる言葉やスモッグ・不換指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典
古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一九〇〇円
国語学金庫

国語慣用句大辞典 白石大三編 A5 六〇〇円

国語慣用句辞典 白石大三編 B6 二〇〇円

国語史辞典 林巨樹他編 B6 三〇〇円

日本語源辞典 堀井金以他編 B6 一〇〇〇円

京都語辞典 井之口・堀井編 B6 一〇〇〇円

擬音語擬態語辞典 天沼 實編 B6 二〇〇円

近世上方語辞典 前田 勇編 B6 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 堀井素哲編 B6 三〇〇円

明治新語俗語辞典 堀井素哲他編 B6 二〇〇円

難訓辞典 中山 善雄編 B6 三〇〇円

名乗辞典 荒木良造編 B6 一〇〇〇円

名数数詞辞典 堀井素哲編 B6 四〇〇円

あいさつ語辞典 奥山 益朗編 B6 二〇〇円

新版 ことば遊び辞典 鈴木 兼三編 B6 六〇〇円

類語辞典 鈴木 兼三編 B6 二〇〇円

類義語辞典 徳川 宣島編 B6 三〇〇円

表現類語辞典 藤原与一他編 B6 四〇〇円

新版 文章表現辞典 神島 村松編 B6 二〇〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7 電話03-3233-3741-2

連詩と連句 (南柏雜記40)	1
半歌仙「初昔」の卷異論 (II)	東 明雅 ... 2
「灰汁桶の」の卷 鑑賞	東 明雅 ... 6
第三回 猫養同人会	9
歌仙五卷 捌 東 明雅 梅田利子 上月淳子 下鉢清子 中川 哲	
「馬追」付勝練習二十韻	14
第四十六回 猫養会	16
歌仙八卷 捌 東 明雅 穴沢篤子 市野沢弘子 金久保淑子 蒲原志げ子 倉本路子 下坂元子 東 郁子	
全国連句いなみ大会	文 秋元正江 ... 24
半歌仙十卷 捌 秋元正江 東 明雅 内田麻子 式田和子 下鉢清子 杉江杉亭 中川 哲 中島啓世 原田千町 福井隆秀	
新刊紹介	5
雁帛往来	29

表紙 (軍鶏) 宮崎龍火子

連 詩 と 連 句
南 柏 雜 記 40
雅

一九六九年(昭和四十四年)四月、ヨーロッパで有名な四人の詩人がパリに集まって、Rengaを作った。この四人の連衆の一人だったメキシコの詩人オクタビオ・パスは、Rengaの魅力について、その論理的・構成的なものと、また、集団詩としての要素をあげているが、このRengaに対して、大岡信氏が連詩という訳語を付けられたのは、まことに適切であった。

Renga はもちろん連歌であり、彼らが元来、意図したのは異国版の連句・俳諧だったであろうが、それを連詩としないで、連歌・連句と訳すると大きな誤解を生むことになる。連詩はもちろん、五・七・五、七・七のリズムはないし、二花三月どころか、季語の意識もない。発句・脇・第三・挙句、あるいは折・面、さらに序、破、急と言った一巻の構成についても、何の規定もない。大体、一巻を何句で纏めるかという規定もないのだから、それはむしろ当然である。しかし、そんなものは約束事であるから、どうにでもなる、どうだってかまわないことである。

連詩は言ってみれば、親しい詩人が何人か、一台の丸テーブルを囲んで、次々に詩句をつないで行くものである。

1 ぼくはまた帰って来た／この夏の港湾都市に／貿易

のためではなく／世の中でまだ最も汚染されていない領域で／声を交換するために

2 この不意打ちの炎暑の地に／子供にかえったバベルの塔／数十の言語がびびく

3 文法をびよんぴよんスキップしたり／独案のようにくるくる回りながら／敷石の数をかぞえかぞえ／ぼくはやっ

とホテルのバーにたどりつく

連句(連歌)に存在して、この連詩にないものは何だろう。それは誰でもすぐ気づかれるように「転じ」という意識、あるいはメカニズムが全く存在しないのである。1・2・3は全く一統きの風景・動作・感情で貫かれている。これは明らかに我々の先祖が作り出した連句(連歌)とは決定的に異なる別物である。

一付句は前句にのみついて、打越の句とは全く縁がない。このような関係を何回も何十回も繰り返して一巻の作品が創り出される。……この独特の運動、メカニズムさえ失わなければならない、その一巻がどのような形式をとろうとも、どのような式目を採用しようとも、私はそれを連句と認めよう

と思う(昭和五十八年「季刊連句」創刊号)

連詩と連句とは全く別の文芸である。しかし、外人と交歓して行くには、連詩の方が分かりやすく、手軽であるかも知れない。

連詩は連詩として今後の隆盛を期待する。

半歌仙「初昔」の卷異論(Ⅱ)

東 明 雅

「初昔」の卷

捌 水野 隆

初昔雅は色をこのむより
化粧はつかに水仙の空
屋上に仔猫と月と笛吹きと
地球儀まはすきしみしばらく
大硝子のごとき夏ありかげるなり
わが舟させる抜手誰たれ
(ウラ)

楽劇の草稿展ぶる木の床に
更けし街過ぐ風のたてがみ
頬瘦せて聖母たること肯へり
グアダルーパーは沈みゆく寺
スパナーの油まみれのうつくしく
まづ箸付ける飯のぎんなん
ふところに骰子入れて月の山
姫の素足の草の露踏む
きぬぎぬを Silk Silk と訳し棄て
水よりあげて公魚の照り
落花浴び象の望郷完了す
クレヨンいくつ折る、永き日

陸郎 陸郎 陸郎 陸郎 陸郎 陸郎 陸郎 陸郎 陸郎 陸郎
隆 隆 隆 隆 隆 隆 隆 隆 隆 隆

この作品(「俳句研究」四月号所載、水野隆捌「初昔」の卷)の第三までに対しても、私はこの誌前号に疑問の点を列挙して、解答を求めている。それは①旧曆による歳時記と現代のそれとを一巻の中で併用する可否、②発句が恋句の場合の脇句の対応、③第三の留め方の三点であるが、残念ながら今日まで、水野氏あるいは、この連句会を主催した現代連句シンポジウムの方々からは、何の回答もない。しかし、私はそれはそれでよいと思う。あるいはこの小誌の論文がそれらの方々の眼にふれなかつたからかとも思うから、それをなじる気は全くない。要は、私は正しいと思う私の意見を公けにして、より多くの人々に連句に対する正しい知識をもっていただければよいのである。

ただ、私のこの半歌仙「初昔」の巻に対する異論は、決してあの論で終わったわけではない。連句に取って、どんな歳時記を使うか、脇・第三はどう作るべきか、これらも大きな問題ではあるけれども、次に述べる連句の大切なメカニズム、付けと転じに対する異論に比べれば、それは極めて小さな問題である。私はこの作品の付け方、転じ方について大きな疑問があり、異論がある。それで、くどいと思われるかも知れないが、再び、まず、転じについてか

ら私の考えを述べてみたいと思う。

この作品はウラの2句までは下俳諧で各人の付句が紹介されていない。それでウラの3句目から取り上げることにする。

- 1 楽劇の草稿展ぶる木の床に
- 2 更けし街過ぐ風のたてがみ
- 3 頬瘦せて聖母たること肯へり
- 4 グアダルーパーは沈みゆく寺

この3句目「頬瘦せて聖母たること肯へり」について作者は「まだ悪女でいたいけれど、年をとってしまったので、聖母たらざるをえないという寂しい句なんです」とコメントしている通り、前句「更けし街過ぐ風のたてがみ」とは全く別のことを述べているが、前句のさびしい気分をつかんだ、いわゆる起情の句であり、人情自の句である。その点ではうまい句である。しかしながら打越の句から考えると、打越の「楽劇の草稿展ぶる木の床に」が人情自の句であり、また、何か淋しい余情をもった句であるから、何か観音開きの感がしないだろうか。

次、4句目の「グアダルーパーは沈みゆく寺」、この句も同じである。「グアダルーパーはメキシコの聖地で、地名です。このグアダルーパーに聖母が出現したというので、非常に有名です。そこに行つた時の印象なんです」と作者が言っている通り、この句は前句の聖母からメキシコの聖地が出て来た、従来の連句の手法から言えば、物付けであり、其場の付けでもあろう。グアダルーパーというような「なじ

みがなさすぎる」、「一般的でない」地名を用いることには問題が残るとしても、少くとも、新しさ・珍しさという点ではおもしろいと思う。

しかしながら、この句は人情なし、場の句であるが、打越の「更けし街過ぐ風のたてがみ」も人情なし、場の句であるから、ここでも、場の句の観音開きが見られる。つまり、中の「頬瘦せて聖母たること肯へり」が、同じ淋しい気分の人情なしの句に挟まれているため、この三句が一続きの景と解されかねない恐れが出る。

このような三句の転じが全部無視されている連句は、連句と言えるだろうか。私は曾て、次のような意見を述べたことがある。「私は連句が将来いかに変化、変貌しようとも、絶対に失つてならぬものは、作品を創り出すこの文芸独自の運動であり、メカニズムであると思う。付句は前句にのみにつき、打越の句とは全く縁がない。このような関係を何回も何十回も繰り返して一巻の作品が創り出される。……この独自の運動・メカニズムさえ失わなければ、その一巻がどのような形式をとろうとも、どのような式目を採用しようとも、私はそれを連句と認めようと思う」(昭和五十八年「季刊連句」創刊号)そして、現在でも私はこの意見を固執している。

連歌・俳諧・連句の歴史を通して、これらの文芸の最も大きな特色は、この三句目の転じを重視するところにある、それがこの文芸のいわば命で、他の和歌、俳句はもとより、外国の詩歌には全く見られないところである。連句が明治

以来一時全く廃れて無視されたのも、正岡子規が外国の文学にないこの三句の転じを嫌って、連俳非文学の説を出したからに外ならない。

だが、外国文学にあるうがなかるうが、日本においては、連歌はすでに千年の歴史をもち、俳諧でも四百年以上の歴史をもって、文学として認められて来た。宗祇の水無瀬三吟、芭蕉の七部集の俳諧、その文学性を否定することは、誰にも不可能であろう。

連歌では、三句の転じをなすために、体・用の法を用いた。例えば水辺の語を

体 海・浦・沼・河・池
用 舟・魚・海人・波

などに分類して、三句続ける場合、用・体・用または体・用・体と続けることを禁じたのであった。この手法は貞門俳諧のころまでは一応守られたが、その後、人間社会の生活を詠んだ句が中心になって来ると、体・用のかわりに、人情の句を自・他、人情なしの句を場の句として、三つに分けそのそれぞれが打越にならぬような方法を考えたのが芭蕉である。

鶯の羽も刷ぬはつしぐれ

一ふき風の木の葉しづまる

股引の朝からぬる、川こえて

たぬきを、どす篠張の弓

まいら戸に鳶這かゝる宵の月

人にもくれず名物の梨

場 場 自 自 他

ども、転じ方については何も触れていない。おそらく、虚子は自他場というようなものは念中になかっただろうし、三句の転じに就いても、はっきりした概念はもち合わせていなかったであろう。

子規が明治二十六年、「連俳非文学論」を公表して、連句衰亡の元をつくったことは有名であるが、弟子の虚子は連句に興味を示し、俳誌「ホト、ギス」に連句に関していろいろ発言し、その中で「俳体詩」というものを提唱した。それは、連句の中から、意味的連繋をもったフレーズを抜き出し、これにヒントを得て創り出される詩である。即ち、連句の中で転じのない部分のみを取り上げる詩である。彼はまた、昭和十三年四月「俳諧」という雑誌を年尾に出させ、昭和十九年まで続けたが、この雑誌に見られる連句についての考え方も全く変化していない。

要するに、今日の「転じ」のない連句（俳諧）を作った張本人は高浜虚子であったが、俳壇の大御所としての存在があまりにも大きかった為に、それ以後の連句はみなその害毒に侵され、自他場を無視した、転じの全くないものとなってしまった。これは、彼の言うように俳体詩ではあっても、決して連句ではなく、いわんや芭蕉の俳諧とは、およそ違った別のものである。

私は「転じ」の存在こそが連歌そして俳諧と流れて来た日本の座の文学特有の文学性であり、それを守らねばならないと考えている。だから、自他場をきびしく言ってきたのであるが、本当のところは、自他場でなくても、何か新

この見事な三句の転じの方法は、後に芭蕉の門人立花北枝によって整理され、「付方自他伝」として残されている。中興俳諧の蕪村や几童なども忠実にこの方法を用い、几童には、初心者に自他場を教えた名著「付合てびき蔓」がある。

ところが、明治以後の連句では、この三句の転じは全く省みられず、自他場の法は忘れ去られてしまった。

砧打つ灯と知りてより足転く
うちほゝゑみて物ははぬ君
草に寝て軍馬の手網はなさずに
名を止むべき一句なりとも
朝夕に誦す経ながら間違ひて
涼み将棋に出来し人垣
車からさと現れしもぐり医者
ひとりの女月の土堤ゆく

自 他 自 自 他 他 他

右は高浜年尾著の「俳諧手引」（昭和二十一年刊）所載、高浜虚子捌きの一卷「遣羽子や」の巻のウラの折立から八句目までである。この書の奥書に年尾は「俳諧の手引書というものが世間に甚だ乏しいことを知って居る私としては、このこと（手引書を書くこと）は誰かが為さねばならぬことであると気付いた」と書いている。昭和二十一年と言え、連句（俳諧）のいわば、どん底時代であろう。その頃に手引書を作ったというのは大変なことであつたと思うがこの書には、付け方についてはいろいろの説明があるけれ

しい三句の転じの方法があればと考えるのである。それはあたかも、芭蕉が古い体用の方法から抜け出して、新しい自他場の考え方を創り出したように、芭蕉時代の自他場にかわる、新しい三句の転じ方が欲しいのである。この「初昔」の巻が、自他場の方法に依っておられないことは明らかであるが、さればと言って、別の新しい三句の転じの方法を用いられているとも思われない。それでは連句ではないのではないかと思うのである。私はこのような作品に高い評価はあげられないのである。
次号ではこの作品の付けについて論じてみるつもりである。（未完）

☆ 新刊紹介 ☆

芭蕉の恋句

東 明雅 著

本書は昭和五十四年六月岩波新書（青版）として刊行されたが、而後絶版になっていた。今回、「岩波新書の江戸時代」シリーズの一つとして、特装本で復刊されたもの。

定価 千五百円

「灰汁桶の」の巻鑑賞 (IV)

東明雅

ものおもひけふは忘れて休む日に

迎せはしき殿よりのふみ

蕉

(現代語訳) せっかく宿下りして日頃の物おもいを忘れて
いる所に、またまた、殿から早く出仕するようにせき立て
る手紙が届いた。

(付心・付味) 心付。前句が示している人間の境遇に、い
かにも適切な事件で受けている。位もよく合っているけれ
ども、前句の「……休む日に」というにの字が、前句と付
句とをあまりに安易に結びつける働きがあるため、「風韻
に乏し」とか、「膚浅である」とか言われている。面影の
付(説明は後)

(転じ) これは人情なし、場の句である。しかし、内容は
女性が殿からの文に困惑している気持を述べているが、打
越の女性がただの奉公女であったのに対して、この句の主
人公を殿の愛妾などと見立て替えている。

(補説) 前句は恋句であるから、去来はせひ恋の句で付け
なくてはならなかった。そして前句の「ものおもひ」を、
人を恋うての物おもひから一転して、人から愛され過ぎて
そのために悩む女性の像にしたのは手柄である。そして、

して気の毒であった。

また、麦水や魚潜が、この主人公を平家物語の妓王の面
影と取ったのは、この句の「ものおもひ」をあまり真正直
に取ったため、「棄てられての物おもひ」(妓王の場合)
と「愛されすぎての物おもひ」(桐壺更衣)とを比べると、
後者の方が前句の見立替えもよく利いているように思われる。

さらに、この主人公を男として、「もの思を忘れてとい
ふ人は藩中武士にて、殿の御意に叶ひ、何事も彼にあらざ
ればならぬといへる御側さらずの人と見て、たまたまの非
番にて私宿に休み居るを、例の御意に入て、非番にても召
るゝ人と付たる也」(「猿みのさがし」)の説もあるが、こ
れは恋句は一句で捨ててはならぬという式目を忘れた解釈
である。

迎せはしき殿よりのふみ

金罽と人によばるゝ身のやすさ

来 蕉

(現代語訳) 里帰りした娘のところに、殿から迎えの催促が来る。そ
の親父も取り立てられ、金罽と人から呼ばれて安楽な暮ら
しとなった。

(付心) 向付。前句の殿、またはその手紙を受け取る女性
に対して、別の人物を出したもの。

(転じ) 打越の女を男に見立替えをし、また、打越の自の
句をこの句では他の句としている。恋句から離れ、安楽な
気分となる。

そのモデルになったのが、おそらく源氏物語桐壺の帝と桐
壺の更衣の物語であったであろう。その源氏物語の面影を
世話化(「芭蕉連句全解」)、庶民化(「古典文学全集」と
いう指摘は恐らく正しいと思われる。ただ、これら多くの
諸書が、「心付にて膚浅の付け」としているのはいかげで
あるうか。この付けは表面は殿よりの文であるが、その奥
には殿よりの深い愛情のこもった文を貫って嬉しいけれど
も、その裏にある様々な問題に悩み苦しんでいる女性の姿
をはっきり描き出している。だから、読者にはあの桐壺更
衣に対するのに似た同情が湧く筈である。

しかも、打越の人情目の句に対して、この句は、人情目
の句らしい内容を持ちながら、自の句とせず、文という恋
の詞を使って、さっぱり人情なし、場の句としている。こ
のような点にも、行き届いた去来の心遣いが見られ、決し
て膚浅(うわつら)だけで、あさはかなこと)の句という
誇りは当らないと思う。むしろ、あまりにこの句がうます
ぎて、しかも前句に「……休む日に」とあり、前句と付句
があまりに、安易に結び付けた為に、かえって、風韻(趣
があること・風雅なこと)がないとされたのは、去来に対

(補説) まず、金罽とは何か、もちろん、金罽は黄金また
は金色の金属で作った罽であるが、それをもって仇名とさ
れるのは、どのような人であるか。大別して次の五つに分
類できるようである。

①御用達の町人の幅利き、「一書に用達の町人の並ぶか
たなき派利にして、結構作りの腰のものをきらめかす…」
(「大鏡」)

②殿のお気に入り入りの者、この説は「婆心録」・「付合評
注」・「古集弁」・太田水穂・隼原退蔵・中村俊定・「金
づくりの刀の罽のことで、当時の伊達風俗のひとつであっ
たが、ここは主君の寵愛をほしいままにする人の異名…」
(中村俊定「日本古典文学大系」)

③左うちわの者、樋口功・天野雨山・伊藤正雄・阿部正
美、「古註多く之を、前句の女性を殿の覚えめでたき侍に
見立替した付句と解くのは非で、強ひて前句の人物との関
係をいふなら、主君の寵愛を鍾めてゐる者の親の態などと
解したら、才能も無い者が娘故に取り立てられて、所謂左
団扇に世を過すなどの例は、稗史小説の類にも多く見える
ので、却て二句の移り変わりも無理なく肯けるであらう(天
野雨山「評釈」)

④富みて華美を誇る者、幸田露伴、萩原蘿月、広田二郎
「刀脇差の罽を金で裝飾したものをいふ。富裕な、伊達好
みの者が多く用いた。ここでは、さうした華美な風をした
者の渾名として仮に設けたものである。広田二郎「芭蕉連
句集」

花 標

仰ぎ見る梢の深さや花標
瓢虫の待ちかねし晴
鱧の鮓五彩の皿に盛るならん
誕生会の子らが集まり
漸くに築山越しに居待月
露を結びて破璃戸しづもる
カウボーイハットあみだに牧閉す
バーボン受けるテールの上
ちょっと見が良いと早速すりよりて
日本語うまくなった新妻
ゆったりと大きな水車回り出し
名物の店いつも繁昌
寒念仏月をそびらに鉦叩き
モザイク模様のシヨール編む人
年会費只になるまで生き抜くか
餌を啄む手乗り文鳥
花爛漫太郎冠者いざおん前に
一切合切忘れのどけし

清弘元子
清弘元子
清弘元子
清弘元子
清弘元子
清弘元子
清弘元子
清弘元子
清弘元子
清弘元子

春愁の旅の荷物を棚に乗せ
沖の小島に寄せてゐる波
与野党の並立連用いつ果てる
恩師の端溪秘蔵してをり
ななとせに亘る思ひを打ち明けて
炎ゆる抱擁つづくくちづけ
足跡のサワラ沙漠に消えて行き
バザール天秤計る金塊
ぐびぐびと缶珈琲を喇叭飲み
刺子稽古着竹刀担ぎぬ
月今宵塑像の影のくっきりと
夜想曲聴き灯下親しく
葡萄園コリーを放ち共に駆け
だまし舟折るりハビリの母
新聞の子報通りに雨となり
袋に入れて生ごみを出す
戸隠の神をろがみぬ花の頃
棚田を遊ぶ黄蝶白蝶

下 鉢 清 子 捌

梧 桐

梧桐や講釈席の跡に佇つ
虎が雨とてつぼめたる傘
オフィスビル冷房もよく整ひて
ポケットの中キャラメルの粒
高速艇見送る波止場織き月
荷物を置けば驚馬飛出す
石段は金比羅祭人の列
飲まなきや損々樽の生酒
間違つた電話番号教へられ
田舎者だがネアカ明朗
サポーター腕にミサンガ顔に筋
今日の佳き日に日の丸を揚ぐ
鳩無心に遊ぶ月の池
遠くに響く焼落の声
全員がノットギルティ陪審員
自信の英語うまく通ぜず
遅れ咲き安曇野の花淡くして
親を離れて駆ける若駒

和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子

中 川 哲 捌

春昼に撮りまくるなりカメラマン
プライバシーを言ふな売れっ子
にきびです悪い病じゃありません
姑は嫌弟は好き
うねり串化粧塩して鱈焼かれ
河童思なれば榎下駄を履く
手水舎をききそびれたる老つらし
夢のトルコに誘はれし旅
玻璃の壺東遷遥か世は天平
娥眉嬋々と月になまめき
こちとらはばつたいなごと割床で
秋狂言の果てて川舟
残業をばやししこともなつかしく
ファミコンゲームいつも子に負け
富士山のペンキ画背に薬の湯
入学式の髭をあたりぬ
碑の花に埋もれし古刹あり
ゆらりゆらりと炎ゆる糸遊

和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子
和子 和子 和子 和子

馬追

付勝練習二十韻
東明雅

投句締切
10月20日

ふるさとや馬追鳴ける風の中

撫子残る月代の道

秋深し篆書一幅書上げて

ゴルフのクラブ磨く縁先

付

秋桜子

達子

よしえ

遊

治定 向ひ家の大戸を開き婚の使者

佳作1 横浜に日本一ののっぽビル

同 2 お揃ひのバッグ楽しきミラノ柄

同 3 長唄の晒女もどき新体操

同 4 ベビーカーえくぼも同じふたごちゃん

同 5 久々に会へば保険を勧められ

同 6 同行会車中で氣勢盛り上がる

同 7 駅頭はラッシュアワーの人の波

同 8 凄腕の女社長の目に止まり

同 9 パーテンドー銀のシェーカーカクテル

同 10 古本屋おんど大きく立ち読みす

同 11 一輪車巧みに漕げる子供達

同 12 札所寺内緒で形に破戒僧

同 13 土曜日の休みの隣家賑はへり

同 14 妻はまた湯元巡りの吟行に

和弥
千雪
雅代

※っている晒女の芸を見ているさまであろう。長い布をひらひらさせる踊りは、まるで新体操のゲームを見ているようだとするのは一つの発見であり、おもしろいけれども、前句の人と晒女の間テレビというものが入っているだけ、迫力に欠けるところがある。4これはかわいいうで、クラブを磨いてるおじいちゃんの眼の前に、ベビーカーのつたお孫さんが庭先から登場した景であるうか。5打越と前句がともに自の句、この句は自他半であるけれども、あまり転じが利いていない。6、7、この両句はともに車中あるいは駅頭の様であり、前句でクラブを磨いた人がいよいよゴルフに出かけたところを描いたのであるうが、連句では「続きを言うな」という鉄則がある。8これははっきり恋の句である。恋句でもよいことは既に述べた通りであるが、この句は何か心付けみないな感じがして、女社長の目にとまった秘書となってゴルフのクラブを磨く破目になったというように、強く言えば何か原因、結果を示していたかのように取られかねない。それが難点である。9パーテンドーがクラブを磨いているとすれば、銀のシェーカーなど不用だし、パーテンドーとクラブを磨く人を向付にしたとすれば、場所がおかしいことになろう。10これは女子学生を描いたのだから。おんどは俳味があるがそれだけに折立としてはいかがか。11ベビーカーの句と似た景景であるう。クラブを磨く人の囁きの句としておもしろい。12これは「……内緒で形に破戒僧」と読むのであるうか。破戒僧が札所寺にかけこんで、内緒で僧形にして貰うというの

- 同 15 通販で揃へた指輪ネックレス
- 同 16 離陸せり禁煙サインいま消えし
- 同 17 大見得を切ればおひねり飛ぶ芝居
- 同 18 よく見れば恐竜ではなき爪跡なり
- 同 19 眉太きプロに手ほどき誘はれし
- 同 20 塩煎餅ジノリの皿で運ばるる
- 同 21 年収を越えるとパートに休まる、

二十韻のウラの折立は、月の定座に当たりますが、この巻では脇に月が出たので、雑の句となった。雑の句でも、折立であるから、なるべく、形のととのった丈高い句がよい。その点、ここで恋の句を出すと、いわゆる待兼の恋になるけれども、品格のある恋句なら、許されると思う。

その点、治定の句ははっきりと恋句である。ゴルフのクラブを縁先で磨いていると、向い屋の大戸が開いて婚礼の使者がやって来たという情景は、意外性もあっておもしろい。原句は「……大戸開きて……」とあったが打越の腰に「て」の字があるから一直して「……大戸を開き……」と改めた。この方がより風格があるように思う。向付である。

佳作1の句も、縁でクラブを磨いていると、前景に日本一の超高層ビルが見えるという、其場の付け、これもよい付味であるが、一連が場・場・自・自と来ているので、もう一句人情が欲しかった。佳作2はいかにも新しいセンスがあつて、第三までの古めかしい気分の転じが十分でありかつ、前句の新しさによく付いている。これは恋の呼び出しである。3これはクラブを磨いている人がテレビに映

であろうか。そして、その破戒僧がゴルフのクラブを磨くのであろうか。どうもそれらの点のはっきりしないのである。13これは治定の婚の使者の来る向ひ屋の景と似ているが、治定の句ほどの具体性がなく、意外性もないために、迫力の点で劣るのはやむを得まい。14これは一番普通な付け方であろう。妻はさっさと温泉巡りに、残された夫はゴルフのクラブ磨きにと、何かあわれが感じられるけれども、このような作句の構図はあまりにもありふれたものではないだろうか。15これは佳作2のミラノ柄のバッグとよく似ているが、具体性が乏しい。16これも6・7と似ている。この付心はどうも分からない。17これは温泉場の宿屋で、一方では縁側でクラブを磨く人が居り、一方宿の舞台では出演の役者におひねりをなげる観客がいるというのであるうか。全くあり得ないとは言わぬが多少無理であろう。18縁先のどこかに置かれたものを言っている。珍しいとは思わうがいかに語呂が悪い、「よく見れば恐竜でなき爪の跡」とすれば、すっきりするし、現代は恐竜ブームだからおもしろいであろう。19これも自他半の句である。5の句の感と近いが、何か恋の呼び出しとも感じられる。20ジノリの皿とはいかなるものか。ゴルフのクラブに塩煎餅はあまり付味がよくないのではなからうか。21税金の關係のことを言っていると思うが、一句の意味も曖昧であるし、前句との付心もはっきりしない。

次はウラの二句目、前句が恋だから恋の句を付けること。

第四十六回 猫 藁 会

歌仙八卷

平成五年七月二十一日
於 深川芭蕉記念館

青時雨

東 明 雅 捌

青時雨像の翁は笑みしまま
夏萩の咲く庭の片隅
地図揚げ登山のプラン立つるらん
エスプレッソの碗をあたため
望の月笛咄々といづくより
落鮎を釣る人のあちこち
藁塚の幸手栗橋古賀めぐる
つい飲みすぎずコップ酒なり
眠くなる癖を承知のクラス会
摩利支天様聞のくらやみ
飼猫の髭を抜かれて二三日
第九を聞きてペーチカカ月
痛風がっらしボーマナス懐に
爺婆連れて布畦への旅
弁当の蓋の米粒戦中派
鴉はびこる裏の公園
花曇り遠山を見る埴輪の目
かげろふ踏みて自転車漕ぐ

明 雅
信 子
代々子
正 江
八重子
八千代
八千代
八重子
江 信
代々子
八千代
同
代々子
八重子
代々子

春愁の思ひを秘めし七部集
妖しの影の現れてまた消え
サミットに集ひし党主それぞれに
心太食ひはったいに噎せ
清貧に生きてこの世に半世紀
ティッシュペーパーきりもなく出る
潮の香の同棲時代くされ縁
私やっぱり夫婦別性
燃えるごみ燃えないごみははっきりと
ベカンベ祭りに集ふメノコら
灯を消して名残の月を惜しみけり
つづれさせとやこほろぎの声
放課後の校舎立たされ坊主ある
良寛様は手毬つきつつ
墨の香の匂ひ立つなり日本海
春のショールの風になびきて
花吹雪下天の夢の醒めやらざ
壬生念仏の鉦の鳴るなり

代々子
信 江
八千代
八千代
江 信
八千代
八重子
同
八重子
信
八千代
代々子
八重子

江戸風鈴

穴 澤 篤 子 捌

意鳴り江戸風鈴の鳴りにけり
山梔子にほふ四阿のかげ
白服の中学生の足早に
テレフォンカードピッと取りだす
月円か馳走ならべて友を待つ
夜長のための推理小説
一本杉かすめつはぐれ雁のゆく
たかぶりのこる細き杓あし
貸した金指輪の代と割り切って
辞任発表さきがける人
Jリーグ始めたとたんオフサイド
チワワに似たる子供抱きぬ
熱燗をくみて屋台の月きよし
何の噂か大きくさめする
イスラーム聖地の旅をこのたびも
川底深く古き陶片
花吹雪籠いっばいにあふれるて
忘れ霜ふむ庭の隅っこ

篤 子
啓 世
あかり
啓 子
紀 子
智 恵
政 志
啓 恵
同 世

青饅の味見いかかと聞かれるる
漢字変換ワープロの芸
眉かいてのろませつかちぢぐはぐに
ひと皮むけば誰も同じよ
毒消売おまけにくれし薄荷水
山小屋の主かぶる夏帽
若後家は覚悟の上でありしかど
男嫌ひのほんに床好き
原っぱの押し倒されし草の形
諸葛孔明征けば残月
秋の蠅影に這はせて座る爺
閻魔参りの列につきるて
うそ寒の角をまがればぐらひひょん
こつこつ削るヴィオラ手造
挽きたてのエスプレッソをすすめられ
群なす鯉にとけし薄氷
夢に出てよもつひらさか花満つる
画架を置きけるかぎろひの中

同 世 志 恵 紀 啓 世 啓 篤 紀 志 啓 恵 同 世 志 恵 篤 恵

